

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 7 月 17 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	佐藤 侑太郎

1. 派遣国・場所 (○○国、○○地域)
日本、香川県 小豆島銚子溪 自然動物園お猿の国
2. 研究課題名 (○○の調査、および○○での実験)
小豆島ニホンザル集団の観察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 7 月 5 日 ~ 平成 29 年 7 月 7 日 (3 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)
京都大学 霊長類研究所 渡邊邦夫元教授, 本郷峻教務補佐
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
目的 本出張は、小豆島銚子溪に生息するニホンザル (<i>Macaca fuscata</i>) 集団を観察することを目的とする。小豆島ニホンザル集団は、優劣順位の厳しいことで知られるニホンザルの中でも、極めて寛容な社会を形成することが知られる。冬季には、サルたちが身を寄せ合うサル団子が観察されるが、小豆島集団のサル団子は特に大きい (頭数が多い) ことで有名である。このように特徴の異なる集団を観察することは、ニホンザルという種を理解する上で肝要である。
概要 7 月 5 日 (水): 小豆島へ移動し、午後お猿の国を見学 7 月 6 日 (木): 午前からお猿の国にて観察。 7 月 7 日 (金): 小豆島を発ち帰宅。 サルの観察以外の時間には、醤油蔵の見学など小豆島の文化・伝統に触れた。
所感 小豆島集団を見てまず感じたのは、子ザルが多いということである (図 1)。人による餌付けの影響もあるかもしれない。その他、他の集団との違いがいくつか見られた。まず、身体的特徴として、青い目をした個体が多いように思われた (図 2)。社会的な特徴としては、個体間距離の近さが挙げられる。特に餌やり際には、多くの個体が凝集していた (図 3)。小豆島集団の寛容性を反映していると考えられる。興味深かったのは、このような餌やりのあとで、石遊びを始める個体が多かった点である (図 4)。餌がまだ地面に残っていても、手ごろな石を集めて手で運



図 1. 小豆島の子ザル。この写真のように、子ザルが母ザルの腰にしがみついている光景が頻繁にみられた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

び、やや離れたところで石遊びに興じていた。このような行動は、コドモだけでなく、オトナにもみられた。石遊びに適した大きさの石が多いのかもしれない。あるいは、石遊びはサルにとって一種のストレス・コーピングであることが知られていることから、寛容な小豆島集団でも競争



図 2. 小豆島には、青い目をもつ個体が多い印象を受けた。



図 3. 餌撒きの風景。多くの個体が集まって、穀物や野菜などを食べている。



図 4. 石遊びをする成体オス。

的場面ではストレスを感じているのかもしれない。

PWS 実習を通じ、4月から7月に幸島・屋久島・小豆島という複数のニホンザル群を観察することができた。それぞれに形態的・社会的な違いがあり興味深かった。ニホンザルは日本人にとって最も身近な野生動物であるとともに、霊長類学発展の礎となった動物でもある。下北半島や金華山など他のニホンザル集団も機会があれば観察してみたいと思う。また、ニホンザルの生態や行動だけでなく、ニホンザルと現在のヒト社会との関係について知る機会があればより一層ニホンザルという種の理解につながると思った。

6. その他（特記事項など）

本実習において、京都大学霊長類研究所 渡邊邦夫元教授、本郷峻教務補佐に大変お世話になった。お礼申し上げます。また、お猿の国スタッフのみなさまには、小豆島のサルに関する興味深いお話を伺った。心より感謝申し上げます。